資料１０

日本ジオパーク再認定審査現地審査報告書

ジオパーク名： 三笠ジオパーク.
現地審査員:阿部宗広・新名阿津子・富田貴夫

A.　基本情報

面積	302.52 km^2
人口	8,824（2017 年 10 月 1 日時点）
日本ジオパーク認定年	2013 年
前回の審査日程および審査員名	2013 年 7 月 8-9 日　伊藤和明・廣瀬　亘・日比野剛（審査補助員）
ウェブサイト（URL を記載）	http://www.city.mikasa.hokkaido.jp/geopark/
ソーシャルメディア（すべて列記）	Facebook(日英), Instagram, LINE

B.　提出書類一覧

・現況報告書、添付資料（活動実績）
・パンフレットデータ
・三笠ジオパーク推進協議会組織図
・解説看板データ
・過去における災害の主な記録
・協議会会員名簿
・広報みかさ
・各種観光チラシ
・協議会定期総会資料（4 年分）
・ガイド養成基本方針
・小中学生用ガイドブック
・教育旅行誘致資料
・ジオサイト一覧表
・市内小中学校　取り組み一覧
・三笠ジオパークガイドブック（4 か国語）

C.　地域の地図

D.　前回の指摘事項に関する取組・改善点

（１）ジオと文化を明確にリンクさせたストーリー作り

ジオパークのテーマを「大地の遺産と文明との共生」から「さぁ、行こう！一億年の時間旅行へ～石炭が紡ぐ大地と人々の物語～」に変更し、テーマに地史学的な時間軸を取り入れ、アンモナイトが生きた１億年前から石炭の発見（1868 年）と当該地域における文化形成過程を示す地域性を明文化したものへとブラシュアップしている。なお、テーマについては前回の審査員に報告・意見聴取を行い、協議会での合意形成後、JGN に報告している。

（２）炭鉱遺構の保全

野外博物館エリアや幌内エリアでの炭鉱遺構までの散策路については、舗装や落石防止フェンスの設置など整備が進んでいるが、豪雪地であり炭鉱遺構の施設自体は老朽化・損傷が目立ってきている。現存する炭鉱遺構については、その重要度を調査し、優先度を決定して保全を行っていくとのことであるが、民間所有の遺構もあり、所有者との関係や財政面等も考慮して、継続的に保存に向けた予算確保および対策を行う必要がある。なお、炭鉱遺構は北海道が主導し周辺自治体と共に空知の炭鉱遺産を含む日本や北海道の近代化に伴う「炭鉄港ストーリー」として日本遺産への申請を検討している。

＊保全部会への提案：保全予算の確保の問題

炭鉱遺構の保存については莫大な費用がかかるため、一つのジオパークでの予算確保には限界があるため、国や北海道などの補助金や助成金、さらには他の施策（この場合は日本遺産）との調整が必要となる。この場合、JGN を通じて保全に関する各種施策・手法の情報提供や相談業務を相互実施できれば、実践的なネットワーク活動になると考える。

（３）ジオガイドの養成・組織化

ジオガイド養成基本方針を策定し、2014 年４月１日から運用している。ここでは養成講座や道内のジオパークと連携した実地研修、交流学習会を実施している。ガイドは講習受講や実地レベルに応じて、Ｃ級ガイド（講座・学習会に参加した者）、Ｂ級ガイド（ガイド必須科目を受講し５回以上ガイドを実施した者）、Ａ級ガイド（実地・筆記の認定試験に合格した者）、三笠ジオガイドマスター（エリア横断ガイドを３回以上実施、状況に応じた対応ができる、再審査やジオパークの大会等での PR、プレゼン、巡検対応ができる）の４区分を設定している。2017 年 11 月時点でＣ級 16 名、Ｂ級４名のガイドが存在し、Ａ級ガイドの受験資格を持つ者が１名出てきた。なお、2 日目のフィールド審査では、高いレベルのガイド説明もあったが、ガイドスキルにばらつきが見られるため、ガイドを受ける人のレベルやニーズに応じたガイドテクニックを磨くことが望まれる。また、ガイドの組織化も同時に進める必要がある。

（４）看板等の更新

ブルーと白を基調にした看板（案内板・解説版）を 45 ジオサイト中 36 ジオサイトに設置している。内容も図解を多用するなど整備が進んでいる。また、エリアごとにアルファベット記号で区分けするなど工夫が見られ、サイト名は４か国語、内容については英語表記もされ、野外見学地や幌内炭鉱跡等に設置している。一方で、看板未設置場所は私有地や民有地、工場跡地であり、ジオツアーなど許可がないと見学できない場所となっており、資料配布や口頭説明で対応している。設置が必要であると考えられる場所については所有者との調整を進めるとのことである。

＊審査側の検討事項：看板と景観・建物との関係

炭鉱遺構では安全管理面からも、工場跡の建物に看板を設置することについては慎重な検討を求めたいと考える。また、APGN2017 の Guy Martini 氏の講演では景観に配慮した看板の設置（もしくは QR コードをつけたモニュメントの設置）を提案しており、看板の設置については状況に応じた判断が必要であると思うが、設置を推奨するのか、それとも看板に変わるインタープリテーション等の代替措置を認めるのかの統一見解が必要（審査員の能力・経験に大きく左右されるかもしれません）。

（５）ジオツーリズムを意識した導線整備

ジオツーリズムを意識した導線整備は進んでいる。道の駅三笠と隣接する三笠市観光協会では、三笠ジオパークのサテライト施設が設けられ、パンフレット等の配布、ジオパーク関連のグッズや土産物、地場産品が販売されている。また、三笠市観光協会とイオンスーパーセンター三笠店ではジオパークのスタッフがデザイン、設営した展示コーナーが設置されており、季節に応じたイベントや観光情報が提供されている。2017 年にオープンしたビジネスホテルの通路にジオパークの展示をするなど、地域との協力のもとで導線整備が行われている。

SNS の積極的な活用も行われている。拠点施設では LINE, Instagram, Facebook の QR コードを設置しているだけでなく、訪問者がどこへ行けばいいのかを示す「ジオパーク難民救済マップ」QR コードが提供されている。さらに、イオンスーパーセンター三笠店では、インスタグラムへの投稿を狙った顔出しパネルも設置され、ソーシャルメディアを活用したインタラクティブなコミュニケーションを模索している。

（６）ジオパーク活動への住民や地域団体の参加促進

三笠ジオパークサポーター制度や各種セミナーを通じて、住民や地域団体への参加促進を図っている。三笠ジオパークサポーター制度は、ガイドはできないがジオパークを知りたい・応援したいという人が参加するもので、10 名程度の登録があり情報提供などを行っている。

一方で、現在の活動は住民参画を促すというよりも普及啓発事業にとどまっていると言わざるを得ない。もちろん、イベントへの住民参加（炊事補助）などで実施の芽がでてきているので、このまま継続した関係構築が望まれる。さらなる住民参画、地域団体の参加促進を実施するためには、サポーター制度の充実、地域団体の育成、参加意欲のある個人・団体へのアプローチも必要となろう。ただし、厳しい経済状況や人口動態からも、ジオパークを担う市民を獲得する難しさも現実問題として横たわっており、それを突破するようなアイデアも待たれる。

（７）国際対応

ツアーについては外国人対象の巡検の実施、国際学会や JICA の受け入れなど、年間２−３回行っており、英語でのガイド実績を少しずつではあるが積み重ねている。また。ホームページ、ソーシャルメディア、野外博物館エリアのガイドブックで英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語といった多言語の情報発信を行なっている。その他のエリアは英語の準備をしており、見学場所に応じた情報提供をしている。情報については、ALT とのやり取りの中で、訪日外国人が理解できるかどうかをチェックしており、これは中国や韓国についても同様である。また文化遺産については、バックグランウンドの違いを考慮し、日本文化一般の説明から入るなどの工夫が見られる。

（８）協議会事務局のジオパーク専任化

2014（平成 26）年から経済建設部商工観光課地域開発・ジオパーク推進係を新設し、ジオパークを実施する体制を整え、協議会事務局のジオパーク専任化に対応した。事務局体制については、専任７名（うち地域おこし協力隊２名）兼任４名の 11 名体制で活動を推進し

ている。土日勤務の多い事務局スタッフは月曜公休に設定するなど、勤務形態の改正も自治体ぐるみで条例化している点は、実態に応じた柔軟な組織運営の点で高く評価できよう。

E.　ユネスコ世界ジオパーク運営指針基準の検証

E.1　領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

三笠ジオパークはユーラシアプレートと北米プレートの衝突によって形成された日高山脈の外縁部に位置し、蝦夷層群三笠層からは一億年前のアンモナイト化石が多く発見され、5000 万年前に形成された石炭層である石狩層群幾春別層が炭鉱町三笠の歴史を作っていった。地質地形遺産は 45 ジオサイト中 16 ジオサイトある。約 1 億年前の三笠層と約 5000 万年前の幾州別層の「ひとまたぎ 5 千万年」の境界線である不整合をはじめ、断層運動が明確に観察できるサイトや、条痕が見られる断層面に触れられるサイト、石炭が露出しているサイトなど、三笠を特徴づける貴重なサイトが存在する。

三笠ジオパークでは 45 か所のジオサイトを 6 エリア（桂沢、野外博物館、幾春別・奔別、幌内、三笠、達布山）に区分して保全保護、活用を行なっている。その他、重要露頭や炭鉱遺構およびその関連史跡に関しては「その他のジオサイト」と区分している。この 6 エリアはジオツアー開催対象地域の目安として設定している。審査時点ではジオサイト一覧表はあるが、ジオサイトのモニタリング・管理については関係機関との調整によって実施している。なお、2018 年度にジオサイトカルテの作成の実施を予定している。

三笠市立博物館に化石が持ち込まれることがあり、その化石の採取に関しては許可を取っているものもあれば、無許可で採取されたものもある。しかしながら、公共の福祉という観点で、無許可でされた化石の持ち込みも緊急避難的に受け入れを行なっている。もちろん、無許可採取は看過されるべきことではないが、受け取りを拒否した場合に起こりうる事態（化石の無許可採取、売買など）を考慮すると、こういった化石の受け入れができる施設の存在意義を否定することはできない。

特に重要な地形地質サイト：
・桂沢ダム原石山：三笠層の露頭
・野外博物館エリアの不整合：三笠層と幾春別層の不整合が見られる露頭
・幾春別層：野外博物館、幌内エリアに分布する露頭
・鏡肌：断層

指摘事項　有
指摘事項：地質地形調査を踏まえたジオサイトカルテの早急な作成をお願いしたい。またそれと同時に後述の通り、古生物に加え、その他の地球科学（特に地形学、地質学）の研究を促進するような取り組みをお願いしたい。

E.1.2 境界線

三笠ジオパークは三笠市の行政界を境界線としており、境界線は明瞭である。

指摘事項　無

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

ジオパークの可視性は確保されている．まず、情報発信という点においては、三笠ジオパークのウェブサイト、ソーシャルメディア（LINE, Instagram, Facebook）を運営し、紙媒体のパンフレット、リーフレット、ガイドブックを拠点施設で配布している．看板（解説版・案内板）は、ブルーと白と基調にしたものを 45 サイト中 36 サイトに設置している。内容も図解を多用するなど整備が進んでいる。また、エリアごとにアルファベット記号で区分けするなど工夫が見られ、サイト名は 4 か国語、内容については英語表記もされ情報提供されている。中心市街地にはアンモナイトが描かれたジオパークのフラッグが設置されており、街の中を歩いていてもジオパークにいることが認識できる。ジオパークラッピングの自動販売機も見られ、売り上げの 2%が協議会会計に入金される仕組みになっている。

ソーシャルメディアの積極的な活用は評価に値するであろう。拠点施設では LINE, Instagram, Facebook の QR コードを設置しているだけでなく、google map と連動した「ジオパーク難民救済マップ」の QR コードが提供されている。さらに、イオンスーパーセンター三笠店では、Instagram への投稿を狙った顔出しパネルも設置され、ソーシャルメディアを活用したインタラクティブなコミュニケーションを模索している。ただし、イオンスーパーセンター三笠は地域住民の日常的な買い物空間であり、利用者は地域住民であると考える。このコーナーの活かし方については、訪問者数や属性等のデータに用いた戦略的な活用があるとさらに良いものになると考える。

指摘事項　無

E.1.4 施設・インフラ整備

拠点施設には博物館として三笠市立博物館、三笠鉄道記念館、ビジターセンターやインフォメーションセンターとして三笠市役所（三笠ジオパーク推進協議会）、道の駅三笠、三笠市観光協会、イオンスーパーセンター三笠店が挙げられる。

博物館施設である三笠市立博物館は、質・量ともに国内一を誇るアンモナイト化石の展示や炭鉱の歴史、民俗の展示もあり、博物館としてのみならず三笠ジオパークの核施設としての機能を有している。ここには 3 人の地球科学者がジオパークと兼任で常勤しており、調査研究と普及啓発に積極的に取り組んでいる。審査中も館長や学芸員によるインタープリテーションは質が高く、それぞれの研究者の創意工夫が見られる。ビジターセンター・インフォメーションセンターにはスタッフによる展示コーナーや情報コーナーを設置し、三笠ジオパーク認定商品を販売したりするなど、ジオパーク導線整備や地域経済の活性化に一役買っている。

指摘事項　有
指摘事項
・今後は三笠市をジオパークで統合していくためにも、市立博物館や鉄道博物館など、拠点施設と位置付けているものについては、可視化及びパンフレット等でのロゴマーク使用などジオパークとの関係性を明示する必要があろう。
・博物館には炭鉱の歴史や民俗の展示があるが、ただ単に並べているだけの展示となっているので、ストーリー性を持った展示および解説の拡充に努められたい。

E.1.5 情報、教育、研究

看板（解説版）については、カラーリングも統一されており、視認性もある。多言語展開もしており、一定の評価はできるものの、多言語展開においては一部、タイトル表記のみのものも見られる。タイトル表記のみだと、その言語でそれが何かを知ることができない。限

りあるスペースを活かすためにも、訪問者がどの言語を選択して読んでいるのかを調査し、訪問者ニーズに応じた言語展開をされることを試していただきたい。

ガイドブックには全体を網羅した「三笠ジオパークガイドブック」と野外博物館エリアのガイドブック（5 言語）がある。全体を網羅したものは、ジオパーク全体のストーリーから始まり、各サイトへとストーリー展開されている。地図や図、写真も多用されており、年齢問わず読みやすい構成となっている（ただし、幼児、小学校低中学年は除く）。野外博物館エリアのガイドブックもまた地図や図、写真が多用されており、実際に持って歩く際に、地層や不整合などの地質学的にも景観を読むポイントがわかりやすく示されている点も評価できる。

三笠ジオパークでは地域内外を巻き込んだ教育実践を展開しており、日本の中でも優良事例であると考えられる。三笠市自体、全国に先駆けて小中一貫教育を導入した地域であり、ジオパーク導入後はジオパークを活用して小学校と中学校の学年を超えた地域学習を実践している。また、三笠高校による地域の特産品を活用した「高校生レストラン」の開業を控えている。さらに、三笠の特徴を活かした教育旅行誘致パンフレットを作成し、プロモーション活動を展開しており、実際の教育旅行件数も伸びている。小中高だけでなく大学や各種機関（博物館・学会）の調査研究や巡検の受け入れも実施している。三笠ジオパークの教育については特筆すべき活動が多く見られるので、これらについては「E5.教育」で詳述する。

研究については 2014 年以降をみると三笠市立博物館の紀要でアンモナイト化石等の古生物学の研究論文がコンスタントに公表されており、古生物学分野の蓄積が特に厚い。一方で、それ以外の分野の研究成果は建築学による炭鉱遺構調査（7 本）、友子の墓（炭鉱労働者の墓）における墓跡情報の変化を研究した高橋（2014, 2015）とジオパークにおける博物館活動の役割について三笠市立博物館を事例に検討した栗原（2017）のみであり、古生物学を除く自然科学やその他の人文社会科学の 2014 年以降における研究蓄積が見られない。ゆえに、古生物学や炭鉱遺構の調査研究、民俗研究についてはこのまま継続できるような環境を整備し、それ以外の分野の研究については研究成果が出るような研究協力体制の構築、研究環境の整備や研究支援を進めるべきであろう。

指摘事項　有

指摘事項：古生物学と炭鉱遺構調査以外の研究成果の蓄積が薄い。地域性から考えて偏りが出るのは否めないが、ジオパークの基礎となる地球科学（特に地形学・地質学）研究と人文社会科学的研究が進展するよう研究体制の構築、研究環境の整備や研究支援を進める必要がある。もちろん、古生物学や炭鉱遺構の調査研究、民俗研究については継続した研究成果が出るような研究支援をされたい。

E.2　その他の遺産

E.2.1：自然遺産

ユネスコの他のプログラムや国立公園との重複は見られないが、桂沢エリアが富良野芦別道立自然公園に含まれる。三笠ジオパークでは地形地質遺産を除く自然遺産として「アカダモの木（明治期の移住者の目印になったもの。植生と文化の関係を示す）」と「ぶどう畑とワイナリー（農村景観）」をサイトとして指定している。2017 年 11 月時点において、これら以外の生態系に関係するサイトは指定されていない。なお、炭鉱操業時には工場が立地していた地域において植生の回復が見られるところもあることから、年次的に植生調査を実施している。また、3 エリア（野外博物館エリア、達布山エリア、幌内エリア）では植生調査が完了している。野生動物および他エリアの植生について引き続き調査を実施する予定である。

指摘事項　無

E.2.2 文化遺産

三笠ジオパークを代表する文化遺産は炭鉱遺構である。ここでは明治以降の開拓者たちの歴史がこの炭鉱遺構とそれに付随するインフラストラクチャー（鉄道、道路、集治監、住宅整備等）に残されている。これらは他のユネスコプログラムとの重複はないが、経済産業省が 2009（平成 19）年に認定した近代化遺産「我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群」の構成遺産リストに北炭幌内炭鉱・幾春別炭鉱鉄道関連遺産が記載されている。

指摘事項　　有
指摘事項：炭鉱遺構の保存とツアー時の安全管理の徹底を引き続きお願いしたい。

E.2.3 無形遺産

無形文化遺産については、北海盆唄やナンコ、友子制度は挙げられるものの、断片的に語られるのみで、体系的にまとめられたリストはまだ無い。故に、アイヌ文化との関係（地名などを手掛かりとした縁辺の地の物語）、炭鉱町の歴史、生活様式や習俗、現代に残るものや既に失ってしまったものなど、三笠の大地と関係する無形文化遺産の目録作成とその継承もしくは記録をお願いしたい。

指摘事項　　有
指摘事項：地域住民、関係する機関や行政所管と連携し、無形文化遺産目録の作成とそれらの継承もしくは記録をお願いしたい。

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

三笠ジオパークは気候変動に対する危険性は低いものの、豪雪、豪雨、洪水、土砂災害といった自然災害に見舞われる地域である。幾春別川上流の桂沢地区の積雪は 13~14mにも達し、春先に大量の降雨があると農地の浸水被害が多くなる。これに対し、ハード面では桂沢ダムの増強、幾春別川の河川改修を行ってきた。住民に対しては 2017 年度、三笠市として防災をテーマとした市政懇談会を開催し、ハザードマップの説明と議論を行ってきた。三笠市としては消防本部生活安全センターを中心に防災・減災対策を進める予定である。ジオパークとしては三笠市と連携し、学校教育の中で幾春別川の河川侵食による地形形成や蛇行河川の切り替え工事による防災対策について説明を行なっている。

指摘事項　　無

E.3　管理運営

三笠ジオパークは 2012（平成 24）年の設立時から推進協議会体制を取っている。2017 年 8 月末時点の構成団体は行政機関 6 団体、研究機関 3 団体、教育機関団体 3 団体、市内関係団体 4 団体、企業 2 団体の合計 18 団体（河川事務所や森林管理署、また市内関係団体の商工会や観光協会、特産品協会など）あり、担当者レベルで日常的なコミュニケーションが取られている。なお、協議会の中に学術部会、教育部会・産業部会を設置しているものの、その活動実態はない。

前回の審査で指摘事項として挙がっていた事務局体制については、2014（平成 26）年度から経済建設部商工観光課地域開発・ジオパーク推進係を新設し、ジオパークを実施する体制を整えた。土日勤務の多い事務局スタッフは月曜公休に設定するなど、勤務形態の改正も自治体ぐるみで条例化している点は、実態に応じた柔軟な組織運営の点で先進事例として高く評価できよう。

前回の認定審査から 2017（平成 29）年度の 4 年間の予算および決算の総額は 1 億 5738 万 6640 円であり、年間平均 3934 万 6660 円の予算を確保している。ハード・ソフト事業の整備の違いから年度によりばらつきはあるものの、ジオパーク活動を推進するにあたって十分な予算であるといえよう。また、第 8 次三笠市総合計画（平成 24-33 年）にもジオパーク活動の推進が明記されていることからも、今後の運営に対しても十分な予算が確保されると見込まれる。

ジオパークの基本計画は「第 8 次三笠市総合計画」であり、三笠市自体の計画に統合されている。行動計画は 2014（平成 26）年 3 月 31 日付で立案され、それを元に活動が進められてきた。行動計画はジオパークの再認定審査ごとに見直されることとなっており、本審査後の指摘事項も含めた次期行動計画が策定される予定である。なお、事務局では SWOT 分析を行い、三笠ジオパークの戦略立案に向けた環境分析を行なっている。

事務局スタッフについては専任 7 名（うち地域おこし協力隊 2 名）兼任 4 名の 11 名体制で活動を推進している。事務局スタッフは事務局長の下、保全、教育、ツーリズム、各種遺産担当（地質・地形遺産、炭鉱、植生）、経理・会計などの担当が配置されている。11 名のスタッフのうち地質学 3 名が三笠市立博物館に勤務する常勤の地球科学者であり、事務局に勤務する地域おこし協力隊 2 名が人文地理学分野の研究者である。

女性は 11 名中 3 名であり、その役割については職種や専門性を考慮したものとなっている．人文地理学の女性スタッフの場合、自分の専門性とスキルをベースとした教育活動や研究活動を実施することができており、ジェンダーの平等が実践できていると考える。また、スタッフの平均年齢が 32.4 歳であり、比較的若いスタッフが従事している。特に若い職員を配置することで人材育成を行い、柔軟な考えや行動を養うためのキャリア教育にも寄与している。スタッフの教育については、三笠市出身のスタッフは幼少期からの経験から地域に関する情報を持っているが、市外出身のスタッフに関しては日常的に学習会や講習会を開催し、学習機会を提供している。

・地球科学者
加納　学　：三笠市立博物館　館長・学芸員　古生物学（白亜紀二枚貝と糞石）
唐沢　與希：三笠市立博物館　研究員・学芸員　地質学（アンモナイト）
相場　大佑：三笠市立博物館　研究員・学芸員　地質学（アンモナイト）

・直接雇用スタッフ
奥園　莉紗：地域おこし協力隊　人文地理学
重松　百之香：地域おこし協力隊　人文地理学

指摘事項　　有
指摘事項
・事務局は事業を強力にけん引しているが、協議会の組織運用体制も機能不足なため、事務局が全てを抱え込まず、地域の人たちや連携団体と関係を構築しながら協働してジオパークを育てて行けるよう、市民参画を強力に推進していただきたい。
・ジオパーク活動は市の主要事業の一つに挙げられ、ジオパーク事業に対する予算は潤沢であり市の意気込みが伺えるが、三笠市も地方自治体の例に漏れず厳しい財政事情のなかで、ジオパーク活動を持続させていくためには、ツアーや教育旅行のプログラムを魅力的なものとし、収益を出すなど協議会の自主財源を確保していくことも検討されたい。

E.4　重複（オーバーラッピング）

ユネスコプログラムとの重複はないが、道立自然公園との重複が見られる。桂沢エリアが富良野芦別道立自然公園に含まれており、これらを管理している国・道機関（国土交通省北海道開発局　河川事務所・ダム建設事業所・ダム管理支所・林野庁　北海道森林管理局）と調整している．実際には、協議会総会時の確認・ツアー時の各種確認調整、担当による説明等を行うものである。空知総合振興局は協議会会員であり、ジオパークへの協力が見られる。また、林野庁から「レクリエーションの森」の指定を受けており、桂沢湖畔などの利用促進を図っている．

指摘事項　無

E.5　教育活動

先述の通り、三笠ジオパークでは地域内外を巻き込んだ教育実践を展開しており、日本の中でも優良事例であると考えられる。三笠市自体、全国に先駆けて小中一貫教育を導入した地域であり、ジオパーク導入後は教育委員会の全面的な協力のもとでジオパークを活用した地域学習を「地域科」という授業区分を設け、学年に応じた教育プログラムを積極的に実践している。以下、特筆すべき教育プログラムについて紹介する。

2013（平成25）年から開始した三笠中学校2年生向け教育プログラム「ジオパーク解説員になろう」では、座学とフィールド授業を行い、受講した生徒が野外博物館エリアで三笠小学校6年生を案内することを実践している。ここで使用されるテキストブック「三笠ジオパーク小中学生用ガイドブック三笠一億年の旅」は小中学校を通じて使用され、ジオパークのスタッフと学校教員の協力の下、授業が展開されている。この他にも中学1年生の「ジオパークを学ぶ」では、研修旅行を実施し、TV電話を使った他ジオパーク（ゆざわジオパーク、Mine秋吉台ジオパーク）学習をしており、他地域との比較から自地域を学習する機会を設けている。このように小中一貫教育で共通テキストを用いた教育実践は、教育の継続性を確保し、児童生徒の地域学習の習熟レベルを上げていく上でも効果的であると考える。

さらに、教員との連携も進んできている。三笠ジオパークでは教員向けジオツアーを実施してきたが、これに加え2016（平成28）年からは三笠ジオパークESD推進協議会を発足し、地域学習カレンダーの作成を行った。これによりジオパークと学校とのコミュニケーションが進み、意思統一を図ることに成功している。地域学習カレンダーで学年別・単元別学習項目を可視化することにより、一貫した教育実践を展開できるようになっただけでなく、人事異動があった際にも対応できる体制を構築した点でも評価できる。

この他にも調理師コースと製菓コースを有する三笠高等学校では、地域の特産品を活用した「高校生レストラン」の開業を控えている。さらに、三笠の特徴を活かした教育旅行誘致パンフレットを作成し、プロモーション活動を展開しており、実際の教育旅行件数も伸びている。

このように、三笠ジオパークの教育実践は児童・生徒、教員を巻き込んで地域的に展開されており、JGNの中でも優良事例であると考える。今後はこの教育実践がもたらす効果について、児童・生徒、教員に対する継続した調査を行い、ライフステージやキャリアパスに応じて、どのような教育効果がもたらされるのかを明らかにし、ジオパークにおける教育実践の到達点を明らかにしていただきたい。

指摘事項：有
指摘事項　教育効果を実証することにも取り組んでいただきたい

E.6　ジオツーリズム

協議会は積極的なツーリズム活動に取り組んでおり、様々なツアーの開催や教育旅行の受け入れにより、集客は年々増加傾向にある。三笠ジオパークは札幌からのアクセスは約 1 時間であり、富良野との結節点にあたり、質の高いツアーを提供することで今後はインバウンドの増加も期待できる。

三笠ジオパークのジオツアーは地質巡検に偏らず、炭鉱遺産やワイナリーとのコラボレーション、ラフティングを活用したものなど、ツアーの付加価値を高めた企画を開催している。2016（平成 28）年度には北海道博物館が道内のジオパークと連携して実施した企画展「ジオパークへ行こう！」の中でイベントやタイアップツアーを行い、道内ジオパークの横断的な取り組みも実施し、札幌都市圏のファミリー層の参加がみられた。このほか、同じくファミリー層をターゲットとした謎解きイベント（「復活メラメラストーン」など）を開催するなど、ターゲティングに基づいたマーケティングとツアー開発を戦略的に実施している。

道の駅三笠と隣接する三笠市観光協会では、三笠ジオパークのサテライト施設が設けられ、パンフレット等の配布、ジオパーク関連のグッズや土産物、地場産品が販売されている。また、三笠市観光協会とイオンスーパーセンター三笠店ではジオパークのスタッフがデザイン、設営した展示コーナーが設置されており、季節に応じたイベントや観光情報が提供されている。2017 年にオープンしたビジネスホテルの通路にジオパークの展示をするなど、地域との協力のもとでジオツーリズムの振興が図られている。エリアは三笠市 1 市のコンパクトなエリアであり、2 度 3 度と来客してもらえるリピーターを増やす施策も重要である。また、農作物の収穫体験ツアーやワイナリーの見学ツアーを行っているが、他の地域で一般に行っている体験ツアーとの差別化や、それをジオパークとどのように関連付けるかがカギとなってくるであろう。

ジオパークのガイド育成については、先述の通り、ジオガイド養成基本方針を策定し、2016 年 4 月 1 日から運用している。ここでは養成講座や道内のジオパークと連携した実地研修、交流学習会を実施している。ガイドは講習受講や実地レベルに応じて、C 級ガイド、B 級ガイド、A 級ガイド、三笠ジオガイドマスターの 4 区分を設定している。2017 年 11 月時点でC級 16 名、B級 4 名のガイドが存在し、A級ガイドの受験資格を持つ者が 1 名出てきた。なお、2 日目のフィールド審査では、高いレベルのガイド説明もあったが、ガイドスキルにばらつきが見られるため、ガイドを受ける人のレベルやニーズに応じたガイドテクニックを磨くことが望まれる。また、ガイドの組織化も同時に進める必要がある。

指摘事項　有

指摘事項

・エリアは三笠市 1 市のコンパクトなエリアであり、2 度 3 度と来客してもらえるリピーターを増やす施策も重要である。また、農作物の収穫体験ツアーやワイナリーの見学ツアーを行っているが、他の地域で一般に行っている体験ツアーとの差別化や、それをジオパークとどのように関連付けるかがカギとなってくるであろう。

・高いレベルのガイド説明もあったが、ガイドスキルにばらつきが見られるため、ガイドを受ける人のレベルやニーズに応じたガイドテクニックを磨くことが望まれる。また、ガイドの組織化も同時に進める必要がある。ただし、厳しい経済状況や人口動態からも、ジオパークを担う市民を獲得する難しさも現実問題として横たわっており、それを突破するようなアイデアも待たれる。

・三笠ジオパークでしか提供できない多様なジオツーリズムを構築するためにも、事務局内の若手スタッフと地域住民が一緒に考えるツアー提供や外部専門家等の助言を定期的に受けることなど，今後の発展に向けた「仕掛け」があるとさらにジオツーリズムの質と持続可能性が向上すると考える.

E.7　持続可能な開発

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

国連が定める SDGs（2030 アジェンダ）に基づいた活動は実施していないが、三笠市の市政の中で今後の開発についてジオパークを含めた全体的な方向が議論されている。西城市長のもと、炭鉱の閉山以降、成功体験を経験していない三笠市において 4 つのプロジェクト（ジオパーク、高校生レストラン、石炭地下ガスの実用化、イオンアグリ創造）を複合的に実施することで基幹産業を構築し、三笠市の持続可能な開発を実現するとしている。

指摘事項　有・無（審査員では判断つかない項目、下記参照）
指摘事項：

＊審査側の課題：JGN 審査において SD および SDGs をどこまでを求めるのか？

E.7.2 パートナーシップ

地域とジオパークのパートナーシップは「三笠ジオパーク認定商品」に見ることができる。この認定商品は地域振興を図ることを目的として三笠ジオパークをイメージした土産品や食品などを事業者から募集し、認定するものである。認定条件は三笠で産出・生産された商品であることや、三笠ジオパークの要素（アンモナイト、石炭、鉄道など）を模したものなどが挙げられる。本事業は三笠商工会と連携して実施されており、認定を受けた事業者に対しては申請者に補助金を交付し，普及啓発の仕組みを構築している。2017 年 11 月時点で 11 事業者 26 品目（全て食品）が認定を受けている。第 1 号認定となった「ジオ弁」は三笠振興開発との共同開発されたものであり、地層やアンモナイトなど視覚的にも地形や地質に親しむことができる高品質の弁当で、年間 1200 食の販売実績を有している。これらの認定商品は三笠市観光協会やイオンスーパーセンター三笠店で販売するほか、ふるさと納税の返礼品としても使われており、地域経済の発展を目指した取り組みとなっている。

指摘事項　無

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

当地はアイヌ民族の中でも縁辺の地として認識されており、明治期の開拓まで未開の地であったため、先住民族の参加についての検討は不要である。一方で、街中にはジオパークフラッグが掲げられ、アンモナイト化石は市内随所で見受けられる。炭鉱町としての石炭やアンモナイトを住民が日頃からジオパークに親しんでいることが伺えるが、ジオパークの取り組み自体はまだ市民への普及啓発に留まっており、地域の人々を巻き込んだ活動に到達していないため、地元コミュニティの更なる参加促進や、主体的に活動できる場を創造していくことが望まれる。

指摘事項　有
指摘事項：地域住民を巻き込んだ活動をさらに促進する必要がある。

E.8　ネットワーク活動

三笠ジオパークのネットワーク活動で特筆すべきは、ゆざわジオパークとの人事交流事業であろう。2017 年度、両ジオパークはジオパーク専門人事交流事業を実施し、専門員の研

修機会を創出した。それと同時に、両ジオパークを介したジオツアーの実施やビジネス連携も実現しつつある。人事交流に派遣された専門員が、この交流を通じてそれぞれのジオパークに新たにもたらす効果については今後の報告が待たれる。

三笠ジオパークはJGNおよび北海道ジオパークネットワークへ積極的に貢献している。JGNに対しては地球惑星連合大会やJGN全国大会で毎回発表している。また、道内ジオパークネットワークに対しては、メーリングリストの立ち上げ、第2回ジオパークガイド交流学習会の主催など、積極的に活動している。先述の通り、2016（平成28）年には北海道博物館が実施した企画展「ジオパークへ行こう！」でタイアップツアーを実施するなど、道内外のネットワーク活動に貢献している。また、自然災害や大火によって被災した伊豆大島ジオパーク、阿蘇ジオパーク、糸魚川ジオパークに対してはJGNの災害支援方針に基づき、災害支援（義援金）を実施した。

三笠ジオパークの国内ネットワークでの活動は高く評価できる。今後は、GGN加盟如何に関わらず、国際ネットワークへ参加していただき、グローバルなジオパーク活動を知ることで三笠ジオパークに新たな動きを創出してもらいたい。このことが将来の三笠ジオパークの活動的なエンジンを形成し、その波及効果が国内ネットワークに素晴らしい効果をもたらすであろう。

指摘事項　有
指摘事項：国際ネットワーク（GGN, EGN, APGN等）への参加とその成果の地域へのフィードバック。

E.9　地質鉱物資源の販売

販売に関しては、拠点施設の道の駅三笠ではアンモナイト化石が販売されている。海外のもの地域以外のものは取りやめるということを各関係機関とは承諾を得ているものの、アンモナイトの販売は地域に根付いているため、個別に対応している。これも、販売している人と調整して、保護に向けた取り組みになるようにする予定である。

指摘事項　有
指摘事項：地質鉱物資源の販売を中止する努力を引き続き実施していただきたい。また、それと同時に、地質鉱物資源の販売の代替案について事業者と考え、ジオパークを活用した新たなビジネスの創出にチャレンジしていただきたい。

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

防災については、先述の通り、三笠ジオパークは豪雪、豪雨、洪水、土砂災害といった自然災害に見舞われる地域である。これに対し、三笠市としてインフラ整備面では桂沢ダムの増強、幾春別川の河川改修を行ってきた。住民に対しては 2017 年度、三笠市として防災をテーマとした市政懇談会を開催し、ハザードマップの説明と議論を行ってきた。三笠市としては消防本部生活安全センターを中心に防災・減災対策を進める予定である。ジオパークとしては三笠市と連携し、学校教育の中で幾春別川の河川侵食による地形形成や蛇行河川の切り替え工事による防災対策について説明を行なっている。

ジオツアーでの安全対策として、ハチ・マムシ、また熊出没への注意喚起や、落葉による足元が滑ることへの注意などのガイダンスを行っており、ツアー参加者への保険加入も行いリスクマネジメントを実践している。ハード整備を見ると、散策路も舗装整備が進み、落石危険個所にはフェンスが設置されており、安全対策に対応している。

災害対応については、三笠ジオパークでこの4年間に経験した大きな災害はないものの、2016年の台風など自然災害とは無縁ではないため、ジオパーク推進セミナーで防災に関す

る講演会を実施している。なお、自然災害や大火によって被災した伊豆大島ジオパーク、阿蘇ジオパーク、糸魚川ジオパークに対してはJGNの災害支援方針に基づき、災害支援（義援金）を実施した。なお、三笠市としても2016（平成28）年に発生した熊本地震の被災地である熊本県と大分県に対して100万円の寄付を行っている。

指摘事項　無

F.　総括

四年前の認定審査の時からジオパークとして大きな前進が認められた。まず、テーマを「さぁ、行こう！一億年の時間旅行へ～石炭が紡ぐ大地と人々の物語～」に変更し、三笠の地域性が分かりやすく示されている。また「さぁ行こう！」と語りかけることにより、ジオパークへの心理的な導線を敷いているところも評価できる。

保護保全については、露頭の保全、老朽化する炭鉱遺産の保護など、たやすくできるものばかりでは無いが、できる範囲内での保護保全を実施されている。今後は、各種ステークホルダーとの良好な関係を維持しながら、積極的な保全が望まれる。

教育面では、三笠ジオパークでは地域内外を巻き込んだ教育実践を展開しており、日本の中でも優良事例であると考えられる。三笠市自体、全国に先駆けて小中一貫教育を導入した地域であり、ジオパーク導入後は教育委員会の全面的な協力のもとで「地域科」という授業を設け、ジオパークを活用した教育プログラムを小中一貫して実践しているさらに、教育旅行の誘致等で、周辺地域からの教育旅行も伸びており、三笠及びその周辺地域での教育実践は日本の中でも高く評価できるであろう。学年や地域を超えた教育プログラムの実施は三笠の素晴らしい点であり、さらにブラシュアップを望む。さらに、これまでになかった環境教育・郷土教育プログラムを作り出し、国内外でのネットワークでの共有をすべき事例である。

ジオツーリズムも地質巡検に偏らず、博物館やワイナリー、炭鉱遺産とコラボレーションし、大地と人の関係がわかり、参加者の興味を引くようなもので構成されている。また「ジオパーク認定商品」制度を運用し、地元事業者とのパートナーシップが取れてきていると言えよう。

マネジメント体制をみると、三笠ジオパークは三笠市が一市で経営する日本ジオパークであり、ジオパークの基本計画は「第８次地域総合計画」の中で策定されている。日本の多くのジオパークは行政がその経営を担っており、三笠市の場合も同様であるが、既存の地域政策との統合を図っている点において、他のジオパークとの違いが見られる。人口規模や財政規模、産業動態から総合的に判断すると、三笠ジオパークにおいてジオパーク運営組織を行政から外部化するメリットは今のところ見いだすことができず、むしろ１市で展開するジオパークであるからこその行政を中心とした地域統合のあり方を模索できるモデルとなりうるポテンシャルを有していると考える。

実際に、制度改正による勤務形態の変更や他のジオパークとのスタッフ交流事業など、他のジオパークと比べても現実に即した実践的な運営であり、非常にチャレンジングな取り組みとなっている点は高く評価できる。また、三笠ジオパークはジオパークとしてマーケティング戦略を立て、実践している点は高く評価できるポイントであり、このマーケティング戦略に基づきジオパーク運営にも期待できる。さらに、事務局は各種行政機関や各種団体、農業者、商業者、教育関係者といったステークホルダーやシェアホルダーとの関係を構築しながら協働型のジオパークを形成しているといえよう。

現行ではまだ地域住民への普及啓発にとどまっているため、今後は積極的な参画を促進するための時間が必要であると考える。ジオパークサポーター制度などを通じて地域にジオパーク応援団が徐々に形成されているので、彼らが主体的に活動できるような場を創造することが必要不可欠である。もちろん、人口減少という社会状況と炭鉱閉山以降の厳しい経済状況の下、活動家不足や担い手不足は否めない。そういった人材が輩出されるような仕掛けをするような努力を引き続き行なっていただくと共に、各地で実施されているジオカフェのよ

うに市民とともにジオパークを議論する場を創出し、そこから出たアイデアを実現するような市民活動が生まれるよう時間をかけて実践されることに期待したい。

G.　指摘事項

・提案：グリーンカード

・主な指摘事項

＊早急に改善が必要なもの

・地形地質遺産の調査研究と保全保護について、今後は地形地質調査を行うとともに、ジオサイトカルテの早急な作成とその運用が必要である。

・地域住民、関係する機関や行政所管と連携し、無形文化遺産目録の作成とそれらの継承もしくは記録をお願いしたい。

＊中長期的に改善が必要なもの

・協議会構成団体の連携もしくは運営体制の再構築

　ジオパークの中心となる協議会体制が不十分であり、協議会事務局は様々なジオパーク活動を個々に充実させるだけでなく、三笠市以外の団体との連携強化と情報共有、意思決定の場を形成するなど、構成団体やガイド、研究者の方々とともに考え続けられるよう総合的に結びつけて調和を図ることが必要である。また、協議会の部会システムが機能していない場合は思い切った組織改編を実施することも三笠ジオパークでは可能であると考える。自分たちの活動しやすい運営体制の再構築が望まれる。

・　地域住民との協働体制の確立

　事務局が全てを抱え込まず、地域の人たちや連携団体と関係を構築しながら協働してジオパークを育てていけるよう、市民参画の実現に向けた取り組みをさらに推進する必要がある。

・地質鉱物資源の販売中止に向けた努力

　地質鉱物資源の販売が見られる。これまでの経緯を考えると即時販売中止は民間事業者にとって難しい決断になると考えられるので、絶えずコミュニケーションをとり、地質鉱物資源の販売の代替案について事業者と考え、ジオパークを活用した新たなビジネスの創出にチャレンジしていただきたい。

・炭鉱遺構の保全・保護（前回の審査から継続）

　炭鉱遺構を散策する遊歩道は、解説看板の設置を含め整備されてきたが、炭鉱施設自体の老朽化が目立っている。各遺構の価値を検証し優先度を決定して保全していくとのことだが、民間所有の施設もあり、その所有者との交渉や関係者と調整して、予算財源の確保も含め引き続き検討していく必要がある。

・研究体制の構築・調査研究支援体制の構築

　古生物学と炭鉱遺構調査以外の研究成果の蓄積が薄い。地域性から考えて偏りが出るのは否めないが、ジオパークの基礎となる地球科学（特に地形学・地質学）研究と人文社会科学的研究が進展するよう研究体制の構築、研究環境の整備や研究支援を進める必要がある。もちろん、古生物学や炭鉱遺構の調査研究、民俗研究については継続した研究成果が出るような研究支援を検討されたい。

・博物館における人文関係展示の拡充
　博物館には炭鉱の歴史や民俗の展示があるが、ただ単に並べているだけの展示となっているので、ストーリー性を持った展示経路の設定および解説の拡充に努められたい。

・ガイドスキルの研鑽
　高いレベルのガイド説明もあったが、全体的にガイドスキルにばらつきが見られるため、ガイドを受ける人のレベルやニーズに応じたガイドテクニック、インタープリテーションスキルを磨くことが望まれる。また、ガイドの組織化も同時に進める必要がある。道内ではプロガイドが多く活動しており、閑散期である冬期には、道内のネットワークを活用してプロガイドのノウハウ学習機会を設ける等を行い、ガイドスキルの更なる向上を期待したい。

ジオツーリズムの質的向上のために
・三笠ジオパークでしか提供できない多様なジオツーリズムを構築するためにも、事務局内の若手スタッフと地域住民が一緒に考えるツアー提供や外部専門家等の助言を定期的に受けることなど，今後の発展に向けた「仕掛け」があるとさらにジオツーリズムの質と持続可能性が向上すると考える.

・自主財源の確保
　ジオパーク活動は市の主要事業の一つに挙げられ、ジオパーク事業に対する予算は潤沢であり市の意気込みが伺えるが、三笠市も地方自治体の例に漏れず厳しい財政事情のなかで、ジオパーク活動を持続させていくためには、ツアーや教育旅行のプログラムを魅力的なものとし、収益を出すなど協議会の自主財源を確保していくことも検討されたい。

＊今後の発展に向けた提案
・教育効果の検証
　三笠ジオパークの教育実践は他のジオパークにとっての先進事例であるので、今後はこの教育を受けた人、教育をした人双方の教育効果について継続的な調査研究を行い、ジオパークにおける教育実践が与える効果を明らかにされたい。

・国際ネットワーク（GGN, EGN, APGN 等）への参加
　GGN への加盟を目指す目指さないに関わらず、国際ネットワークへ参加し、グローバルなジオパーク活動を知ることで三笠ジオパークに新たな動きを創出してもらいたい。現在、農業振興政策の中で行われているメロン販売の国際戦略にもあるように、三笠もグローバル化の流れに逆らうことは難しく、今後はますます世界との結びつきも強くなっていくものと考えられる。このことからジオパークの国際ネットワークを教育やビジネスで活用し、将来の三笠ジオパークを推進する強力な動力源を生み出すことが可能ではないかと考える。さらに、その波及効果が三笠ジオパーク内外に展開されるマルチスケールなネットワーク活動に素晴らしい効果をもたらすであろう。未来への投資という意味も込めて、この国際ネットワークへの参加を提案したい。

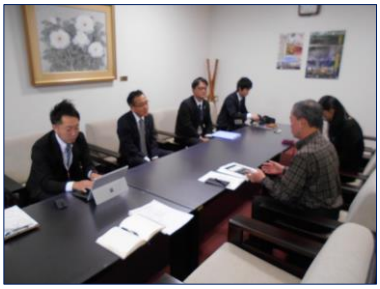
・ブランド化の推進
　三笠市をジオパークで統合していくためにも、市立博物館や鉄道博物館など、拠点施設と位置付けているものについては、可視化及びパンフレット等でのロゴマーク使用などジオパークとの関係性を明示し、ジオパークのブランド化を推進する必要があろう。

H.　行程表

現地審査視察内容・場所	主な対応者	気づいたこと／コメント
1 日目（2017 年 11 月 4 日）		
＜事務局説明・報告会＞ 三笠市役所 会議室 	北山副市長・永田教育長・千葉経済建設部長・高森教育次長・加納博物館長・唐沢学芸員・相場学芸員・阿部事務局長・下村事務局次長・上口事務局・椛木事務局・湯浅事務局・髙橋事務局・奥園事務局・重松事務局	街なかの街路にはジオパークフラッグが掲げられ、アンモナイトの装飾などが随所で見られる。 市役所では、トイレの仕切りもジオパークで飾られ、付近には「民宿アンモナイト」や「ジオパーク焼き鳥」の看板を掲げる店舗もある。 報告会では、現況報告書の項目ごとに事務局から活動を説明。 事務局は、専任 7 名、兼任 4 名の計 11 名と体制を強化し取り組みを推進している。 課題であったジオパークのテーマを再検討し、化石と石炭、それを活用した人々の歴史をつなげるテーマに変更している。 国際対応として、英・中・韓のガイドブックを整備している。
2 日目（2017 年 11 月 5 日）		
＜現地審査＞ 三笠市立博物館外観 三笠市立博物館館内 	加納学博物館長 唐沢興希学芸員 相場大佑学芸員	600 点からなる日本一のアンモナイト化石を中心に様々な化石類を展示。 入館者数は年約 24,000 人、ジオパークに認定され年々増加傾向にある。 貴重な展示物を見せるだけでなく、化石の実物を触らせることで来館者に手触りや重さ、固さ等を体感させている。 館長のガイドは巧妙な語り口で来館者を飽きさせない、解り易く楽しい解説であった。 アンモナイトは地元ではその模様から「菊石」と言われていたなど、昔から身近な存在で、住民にごく自然と親しまれてきたことが伺える。 民族・歴史の展示については、ジオパークとの関係が希薄であるものもあり、見せ方・説明に検討の余地がある。

＜野外博物館エリア＞ 旧幾春別炭鉱錦立坑櫓 	坂井正己ガイド 奥園莉紗事務局員	散策路は舗装済み、解説看板も随所に整備され、落石等危険個所にはフェンスも設置している。 ガイドはハチやマムシ、熊などへの注意喚起や、落葉による足元の注意など、危険防止に務めている。 ツアーでは、ガイドは真面目で丁寧に説明しているが、テープレコーダー型の解説に陥りやすい、対話を活用するなどお客を巻き込んだ説明になるとなお良い。 1 億年前の浅海で堆積した地層(三笠層)と 5000 万年前の地層(幾春別層)との不整合を「ひとまたぎ 5000 万年」と楽しく紹介している。
昼食：ジオ弁 	事務局	地層を表現したそぼろごはん、アンモナイトを表したエビフライ、鉄道車輪型シューマイなど三笠の特色を生かしたおいしいジオ弁。 郷土料理である「なんこ」や「ザンギ」なども、弁当のお品書きにより解説されている。
＜幾春別・奔別エリア＞ 旧奔別炭鉱立坑櫓 旧奔別炭鉱ホッパー 	坂井正己ガイド 上口壮太事務局員	櫓の高さ50m、当時は東洋一の炭鉱と呼ばれた。 当時はこのエリアだけで 15000 人が暮らし、小学校も 60 学級もあり隆盛を誇った場所、北海盆歌もここが発祥地。 ガイドは炭鉱遺構と人々の暮らし・歴史を絡めて説明を行っている。 旧奔別炭鉱遺構は老朽化が目立つが、現在も民間所有となっており、保全活動はなかなか難しい状況であるが、遺構の価値を見極め、選択し保全していくとのこと。

＜幌内エリア＞ 旧幌内炭鉱変電所 		見学に来た観光客もいたが、敷地内は一般に開放されておらず残念である。
旧幌内炭鉱音羽坑 	伊佐治知子ガイド	ガイドの施設を保全したいという強い気持ちが先行する説明で、施設の成り立ちや重要性、活用した人々の暮らしやジオパークとの関わりが伝わらなかったため、お客の立場に立ったガイドスキルを磨く必要がある。
＜達布山エリア＞ 達布山展望台 	鈴木春夫ガイド	ガイドは市の元助役、残りの人生をジオパークに捧げる覚悟で三笠の魅力を伝えたいとのこと。 この幌内エリアはカルチュラルサイトばかりなため、ジオとの関わりを解り易く解説する工夫が必要である。
山﨑ワイナリー 	梨木壮太ガイド	石狩平野が一望できる眺望サイトであり、バスツアー等の導入地として地域の地形や概要説明に活用できる場所。 風が強く、展望台は地震かと思うほど揺れる。 ガイドは季節により、寒さへの気遣いも必要であると感じた。
懇親会（太古の湯） 	山﨑太一ガイド	地層的に７層からなるワイナリーのブドウ畑は、その土壌ごとにブドウの味も異なり、ワイン醸造にも影響する。 加水しないお酒はワインだけであり、まさに大地の恵み、ワインにかける情熱が伝わる説得力あるガイドの説明であった。

	西城市長・北山副市長・永田教育長・千葉経済建設部長・高森教育次長・加納博物館長・唐沢学芸員・相場学芸員・鈴木ガイド・坂井ガイド・高橋ガイド・阿部事務局長・下村事務局・上口事務局	地質との関わりは大学とも連携して研究を進めている。 懇親会場である温泉施設に併設の市内唯一のホテルが今年開業、観光客の受け入れも整いつつある。 通路にはジオパークの展示がありＰＲしている。
3 日目（2017 年 11 月 6 日）		
会長ヒアリング 	西城市長・阿部事務局長・下村事務局次長・椛木事務局	化石の産地、石炭、炭鉱の歴史等三笠はジオパークそのもの。今後展開する高校生レストラン、イオンアグリと連携した観光農園化、石炭地下ガス化とジオパークの 4 本柱である市の主要事業をリンクさせて政策を推進していくとの市長の決意が伺えた。
全体ヒアリング 	西城市長・北山副市長・永田教育長・千葉経済建設部長・高森教育次長・加納博物館長・唐沢学芸員・相場学芸員・鈴木ガイド・坂井ガイド・高橋ガイド・杉田ガイド・阿部事務局長・下村事務局次長・上口事務局・椛木事務局・湯浅事務局・髙橋事務局・奥園事務局・重松事務局	教育・ツーリズムなど、事務局のキーマンにより様々なジオパーク活動を強力にけん引している。 協議会構成員とは個別に打ち合わせをしており、協議会全体の会合も総会だけで、学術・教育・産業の 3 部会もまだ機能していない模様、活動への住民参加を更に促すことが期待される。 傷みの進んでいる各炭鉱遺構の保全については、学術調査を行い、その優先度を整理して保護保全の整備を行っていく。
全体講評 		
プレス対応 	北海道新聞社 山口真理絵記者	記者から審査員には、①現地審査を実施して興味深かったサイトは？②4 年前の認定からの課題が改善された点、の 2 つの質問があり審査員が個別に回答。

道の駅三笠 イオン三笠店 	阿部文靖事務局長 下村圭事務局次長 阿部文靖事務局長 下村圭事務局次長	利用者の多い道の駅には、パネル展示やパンフレットの配布、またワインなどの特産品、ポロシャツ、バッヂなど様々なジオパークグッズを販売している。アンモナイト化石も販売していた。 道の駅に併設された飲食・直売施設の「楽市楽座」も今年オープンした。 イオン三笠店には、特設ブースが設置され三笠ジオパークをPRしている。 食品売り場には、特産品フェアの棚にジオパーク認定商品が並べられ販売されている。

再認定審査参加者一覧

三笠市長　西城　賢策（協議会会長）
三笠市副市長　北山　一幸
三笠市教育長　永田　　徹
三笠市経済建設部長　　千葉　俊行
三笠市教育次長　　高森　裕司

＜三笠ジオパーク推進協議会＞
事務局長　　阿部　文靖
事務局次長　下村　　圭
事務局員　上口　壮太
事務局員　　椛木　　勇
事務局員　　湯浅　綾香
事務局員　　髙橋　佳奨
事務局員　奥園　莉紗（地域おこし協力隊）
事務局員　重松　百之香（地域おこし協力隊）
三笠市立博物館館長　　加納　　学
三笠市立博物館学芸員　唐沢　興希
三笠市立博物館学芸員　相場　大祐
ジオパークガイド　　坂井　正己
ジオパークガイド　　鈴木　春夫
ジオパークガイド　　伊佐　治知子
ジオパークガイド　　梨木　壮太
ジオパークガイド　　山﨑　太一
ジオパークガイド　　髙橋　キクヱ
ガイド随行者　　白澤　誠
ガイド随行者　　牛田　智恵子
ガイド随行者　　杉田　裕樹